

第10章 第二部のまとめ

第二部では、第7章から第9章にわたって、初めての正社員勤務先を離職後のキャリア形成状況をみてきた。この検討から明らかになった主な点は次のとおりである。

- ・「初めての正社員勤務先」離職者の離職後1年間の状況を見ると、男性では正社員として働いていた者が6割弱、正社員以外の雇用形態で働いていた者が約3割で、女性では、正社員は約3割、正社員以外の雇用が4～5割であった。正社員として働いていた割合は、学歴で差があり、男性の大学・大学院卒では約6割だが、高卒では約4割と低い。女性では、男性ほど顕著でないが、高学歴者ほど正社員が多い傾向がある。

- ・離職後に行った求職活動で最も多いのは、インターネット上の求人サイトの利用と職業安定所(ハローワーク・インターネットサービスを含む)の利用である。卒業校の教員などへの相談は少ない。

- ・調査時点においては、男性離職者の約9割、女性離職者の約6割が就業していた。男性の場合は離職者の6割強が正社員であるが、女子では2割強にとどまる。離職から1年間の状況より、男性では正社員比率がやや高まる一方、女性は正社員も正社員以外の雇用も減少し、もっぱら家族の世話などを行っている人が増えた。

- ・調査時点における就業状況は、男性では学歴による差が大きく、高卒離職者の正社員割合は4割強にとどまる。男性の高卒離職者の失業率を疑似的に求めると9.3%と高い。

- ・初めての正社員勤務期間によって、離職後1年間の就業形態も調査時点における就業形態も異なり、短期で離職した人ほどいずれの時点においても正社員割合は小さい。

- ・離職から現在の勤務先に入社するまでの期間は、初めての正社員勤務期間によって異なる。勤務期間が長い人ほど、間の期間は短く、離職の同月か翌月に現在の勤務先に入職している人が多い。

- ・初めての正社員勤務先と現在の勤務先の関係について、両時点の業種の同一性とその間の移動の方向性の点から見ると、男女とも医療・福祉、および製造業の離職者は同一業種内での再就職が多く、相対的には正社員で再就職の割合が高い。一方、金融・保険業、卸売業などを離職した男性は同業種での再就職が少ない。卸売業は女性も同業種での再就職が少ない。参入が多い業種は男性では公務や「その他のサービス業」、女性では「その他のサービス業」である。

- ・職種についても同様に同一性と移動の方向性から見ると、男女とも営業・販売職からの退出が多く、事務職への参入が多い。同じ職種で再就職していることが多いのは専門的・技術的職業と事務職で6～7割に達する。

- ・現在正社員である転職者で、初めての正社員勤務先と現在の勤務先とで業種や職種が一致する人は、初めての正社員勤務先を辞めた理由として「キャリアアップするため」を挙げた

人が多く、逆にそれが一致しない人は、やめた理由として「自分がやりたい仕事と異なる内容だった」を挙げた人が多い。現在の就業先の選択と離職理由は多くの場合、整合しているといえる。

・現在正社員である転職者について、初めての正社員勤務先を辞める直前の週平均労働時間と現在の週平均労働時間を比較すると、辞める直前の労働時間のほうが長時間であった場合が多い。初めての正社員勤務先を辞めた理由に「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかった」を挙げた人の場合、週平均労働時間は、辞める直前には男性平均 60.1 時間で女性平均 55.7 時間であったが、転職後の現在はこれが 12~14 時間程度短くなっていた。転職者の 3 分の 1 が同理由を挙げており、若者の早期離職の少なからぬ部分は長時間労働の職場からの離脱だといえる。

・職業生活に対する満足度を点数化し、現在の勤務先と初めての正社員勤務先に対するそれを比較すると、ほとんどの側面において現在の勤務先への満足感の方が高く、転職の結果を肯定的にとらえていることがわかる。ただし、自分の行動を合理化しようという暗黙の意図が働いて、かつての勤務先への満足感を当時の感情より低く評価している可能性もある。

・現在の職業生活に対する満足感を現在の雇用形態別に比較すると、男性の場合は正社員のほうが満足感が高く、女性は逆に正社員以外の雇用形態のほうが満足感が高い傾向がみられた。

・転職して正社員になっている場合に、初めての正社員勤続期間によって転職先の職場への満足感が異なるかをみると、男性の場合は、「1 年以内」の場合の満足感が低い傾向があった。

・家族形成の状況については、男性の場合、初めての正社員勤務先に勤続している人が最も家族形成が早く、離職者のうち正社員として再就職している人がそれに次ぐ。正社員以外の雇用者や求職中の男性では結婚している人は少ない。女性では、最も家族形成が進んでいるのは、離職して非労働力化した人で 9 割以上が既婚である。正社員の女性では、勤続者も転職者も、求職者に次いで結婚している人の割合は小さく、3 分の 1 程度にとどまる。

・離職後現在は正社員である人は、男女とも、現職への入職後に結婚している人が多い。

・現在の生活全般に対する満足感について、離職者と初めての正社員勤務先勤続者とを比べると、男性は離職者の方が満足度が低く、女性は離職者の方が高かった。男性では離職の有無はともかく正社員であるかどうかで満足感を分けていた。女性では離職して非労働力（専業主婦）になった人が最も満足感が高かった。また、男女とも、求職中の人は特に満足感が低かった。

・初めての正社員勤続期間別に生活全般への満足感をみると、男性については、1 年以内での離職の場合の満足感が低い傾向がみられたが、女性についてははっきりした傾向はみられなかった。

以上のファインディングスを基に、今後重要だと思われる政策の方向を考える。

1. 離職後に正社員として再就職していれば、職業生活の満足感は初めての正社員勤務先より高く、また、離職理由となっていた長時間労働などは改善されている人が多い。離職後の就職活動にハローワーク・インターネットサービスをふくむ公共職業安定機関を活用している人は4割と少なくないものの、正社員での再就職に向けてのさらに積極的な支援が望まれる。

2. 高卒男性は、離職後に正社員として再就職している割合は低く、また、現在も求職中の者も比較的多い。製造業から退出して、小売りや運輸・郵便業等への移動が少なくないが、非正規雇用の多い業界である。高卒男性は、今回の調査ではケース数が不十分な対象ではあるが、他の統計をみても高卒以下の学歴の若年層の失業率や非正規雇用比率は高い。こうした人たちを安定的な雇用に移行するためには、職業能力開発と組み合わせた就職支援が効果的ではないかと思われる。雇用型訓練やトライアル雇用などの施策を継続、拡充していくことが望まれる。

3. 長時間労働や休暇の問題が離職の理由であった人は、再就職先では大幅に労働時間が減少しており、また、異なる業種・職種に転職した人は、仕事の内容がやりたい仕事と異なっていたことを離職の理由とすることが多く、同一の業種・職種に転職した人はキャリアアップを求めての離職であった人が多い。転職して現在も正社員である場合、現職への満足度は高く、若年期の離職にはキャリア探索期としての積極的な意味もあると考えられる。学校在学中のキャリア教育においては、こうした側面も踏まえて、転職に向けての社会的資源の活用についても情報提供を行うことが望ましい。

4. 正社員として再就職している人の割合は、男女とも、初めての正社員勤務先での勤続期間が短ければ低いという関係が明らかになった。とりわけ勤続1年以内での離職の場合は低い。1年以内の離職者については、男性の場合は、職業生活についての満足感も生活全体に対する満足感も低い傾向が明らかになった。こうした非常に短期での離職を抑制するためには、現在進められている、企業情報の多面的な開示を進める政策は大変重要だろう。同時にそうした情報を取得し、判断できる能力を培うことができるよう在学中のキャリア教育を支援していくことも必要であろう。

